

〔特別号〕 栗林中将と日本陸軍

〈平成15年7月研究会 7月1日〉



発行所

同台経済懇話会

〒104-0061 東京都

中央区銀座1-5-13

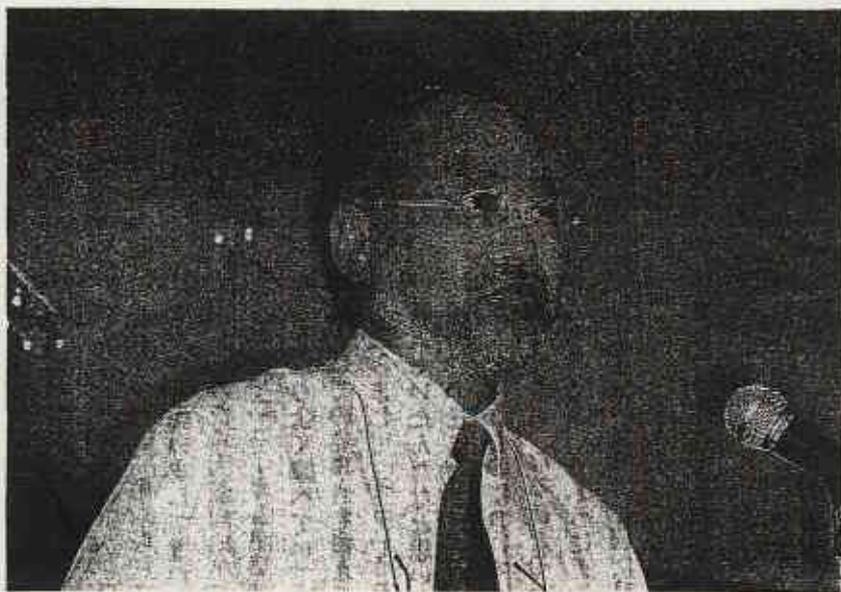
仰秀ビル6F

電話 (03) 5524-3520

FAX (03) 5524-3521

e-mail: jimukyoku@decaa.org

http://www.decaa.org/



日時：平成15年7月1日(火) 午前10時～12時

場所：千代田区 アルカディア市ヶ谷 (私学会館)

(早稲田大学文学部教授 留守 晴夫氏)

留守 晴夫先生の紹介

軍関係以外の方から軍のお話をしていただけで、皆様方から非常に大きな反響があり、朝の研究会としては近來にない大勢の方にお集まりいただきました。留守先生は昭和二十三年仙台市の出身でございます。昭和四十六年に早稲田大学の政経の政治学科を卒業されてからまた文学研究科英文科に入られ、修士博士過程を経られて、六十三年から在外研究員としてマサチューセッツ州に滞在してアメリカ文学の研究に励まれました。帰られましたして助教、そして現在文学部の教授として活躍をしております。

専攻はアメリカ文学でございます。いましてエドワーズ、ホーソン、メルヴィル、ウォーレン、ヘミングウェイと言ふような名だたるアメリカの作家の研究をされており、また、特にテーマとして「南北戦争とアメリカの文化」「日本の近代化と日米関係」というテーマに取り組んでおられます。

なぜ、留守先生が栗林中将の研究に入られたかということ、今からお話があると思っております。さっそく先生からお話を承りたいと思っております。

(常任幹事より)

なぜ今栗林中将か

第であります。

当初はそんなに長く連載するつもりはなかつたんですが、いろいろ書いていく内にだんだんおもしろい問題が見えてくると言いますか、栗林中将の生涯を考へる事が出来るということになって、その位の分量になった訳です。

おはようございます。只今ご紹介いただきました留守と申します。「月曜評論」というミニコミがございますが、そこに三年程に亘って「陸軍中将栗林忠道」という文章を連載しまして、ようやく一冊分位の分量が溜まりました。本に纏めようかと思つていたところに、野地さんの方から是非栗林中将の事を何か話してくれないかという御依頼がありまして、今日参上した次第であります。

私はアメリカ文学が専門で、特にメルヴィルとかヘミングウェイ、メルヴィルというのは白い巨大なマッコウクジラを捕鯨船の気違い船長が追つ掛けるという『モービー・ディック』という話で有名なアメリカ最大の作家であります。ヘミングウェイというのは、これまた巨大な

勝敗は日米文化の差

アメリカ文学者の衝動的論述

カジキマグロを老いたる漁師が追っ掛けるという『老人と海』という作品で有名な二〇世紀の大作家であります。なぜかどちらも魚を追っ掛ける話に縁があるわけですが、そういうアメリカ文学、アメリカ小説の勉強をしているものですから、軍事問題についても帝国陸軍についてもまったくの素人であります。

そういう素人の私が何故、硫黄島戦或は栗林中将のようなことについて書くのかという質問を連載中からよく受けました。中には軍事評論家になるつもりかというふうなことを言われたこともありました。もちろんそんなつもりも能力もありません。で、何故私が硫黄島戦とか栗林中将のことについて書くことになったか、その理由なんです。これは一口では申し上げ難いようないろいろなことがあるのですが、前もって少しご説明しておいた方がこれからの話がお判りになりやすいだろうと思います。

私が栗林中将に関心を持つようになったきっかけは、今から十五年程前のことです。当時大学の在外研究員として、マサチューセッツ州のボストンから車で二〇〇キロ位西に行ったところにあるアマーストという小さな大学町に滞在しておりました。明治時代のクリスチャンの内村鑑三とか同志社を作った新島謙とかが学んだ有名な大学です。ある時、たまたま、古本屋の店

先のきたない小さな本が山積みになっているところで『硫黄島』という題の本を見つけました。一九六五年、リチャード・ニューカムというジャーナリストが書いた本です。発売と共にたちまちベストセラーになったと言われています。題名がちよっと気になったものですから、暇な時にでも読んでみようかと思いついて買ってきて、読み出してみたら大変面白かったです。

特に、ニューカムが栗林中将のことをかなりよく調べていて、しかも指揮官としての見事さを讃えているところを読みまして、そういうりっぱな日本軍人もいたんだなと思いました。私は昭和二十三年生まれの戦後生まれで、軍人というものについてはまったく無知ですから、なるほどそういう軍人もいたのだというふうに思ったわけでありました。アメリカに居たせいもありまして、日本人として何か誇らしい気持ちになったことをおぼえております。

その後、別に栗林中将の本を書くなんて思ったことはなかったんですが、帰国してから専門のアメリカ関係のことについて、特にアメリカのすぐれた文学者とか思想家を通してアメリカ文化論のようなものを『月曜評論』に連載していたのですが、そのうちに何か優れた日本人について書いてみたいなど、これは日本人としての心理的必然なのかもしれないが、そういう気持ちが出てきました。誰がいるかなと思っ

時にふと浮かんできたのが、栗林中将だったわけです。まったくの偶然で始まったということになります。

帝国陸軍きつての知米派で、アメリカ滞在五年間、アメリカの力を大変よく知っていた。ですからアメリカと戦争をするということに対しては極力反対していました。しかし最後には硫黄島でアメリカが舌を巻くような見事な戦いをして戦死しました。硫黄島戦は太平洋の戦場でアメリカ軍の被害が日本軍のそれを上回る唯一の戦闘でした。アメリカ軍の死傷者が二万七千、日本軍が二万。その唯一の戦闘を指揮して散つていった。

そういう栗林中将という立派な日本人の、アメリカとの戦いぶりについて調べていったら、日本人とアメリカ人という、文化を頗る異にするそれぞれ国民性の本質的問題といえます。そういうものについていろいろと面白いことが分かってくるのではないかと思いました。といえます。戦争というのは文化ですから、文化というのはどのつまりは民族の固有の生き方ということになるわけですから、日本人はいかに日本人らしい戦い方をすれば、アメリカ人はいかにアメリカ人らしい戦い方をすれば、ということになる。ですからその日本人らしき、或はアメリカ人らしきというものを、硫黄島戦を通して考えて見たいというふうな気を起こしたわけです。

また、近代日本といえますのは、今ペリーがやってきて百五〇年ですね、あれから百五〇年後の今日まで、好むと好まざるとにかかわらずアメリカと宿命的に結び着いているわけで、今後も予見しうる将来は結び着いて行かざるを得ない。そういう日米の宿命的関係というものを通して近代日本のいろいろな問題について合わせて考えることが出来たらいいなと、『盲蛇に怖じず』という感じもあつたのですが、そういうことを考えて栗林中将についての連載を始めたのです。

途中いろいろと中断しまして、なかなか書けなくなってしまうということがあります。資料が本当にたりなくて、戦後の打ち壊しといえます。軍関係の資料というのは本当に無くなつてしまつていて、随分苦労をしました。そういう意味での困難もあり、随分中断したんですが、中断していると栗林中将が天国で泣いているぞとある読者から言われまして、これは頑張らざるを得ないなという感じで一応なんとか最後まで行つたということなんです。

アメリカ人にとっての

硫黄島戦

そうして調べ出しますと驚いたのが、硫黄島戦がアメリカ人にとっていかに大きな意味合いを持っているかということでありました。

ニューカムの本は発売されてすぐベストセラーになりましたけれど、ここに持ってきたこの本は今から三年前に出た本です。Flags of Our Fathers、「父達の旗」という本ですが、これも発売されてすぐベストセラーになりました。丁度この本が発売された頃に私はアメリカを旅行しておりました、ワシントン近辺を彷徨っていたのですが、

間アメリカでは硫黄島戦について沢山の本が出ています。いろいろな専門家の研究書も書かれています。要するに硫黄島戦に対するアメリカ人の関心は今なお強く持続しているということがあります。

どこの本屋に行っても目立つところにこれが置いてありました。相当売れているんだなという感じがしました。「父達の旗」という題からも判りのように、硫黄島の摺鉢山のとつべんに星条旗を立てた五人の海兵隊員と一名の海軍兵の、その海軍兵の息子ジェイムズ・ブラッドリーが書いた本です。摺鉢山に星条旗を立てるまでの六人の若者の人生の軌跡と、その後どうなったのかということはかなり克明に調べた本です。

本だけではなくて、今回のイラク戦争の時にたまたま硫黄島戦にアメリカ人が言及するのに三度接する事になりました。一度目は、CNNのニュースを見ていた時です。アメリカ軍がイラク領内に攻め込む直前の時期ですが、クウェート領内のイラクとの国境に近い米軍のキャンプにイラクからミサイルが飛んで来て、頭上を越えていった時の模様をCNNの従軍記者がテレビで報道しておりまして、最後に「キャンプ硫黄島からのレポートでした」と言ったのです。要するにアメリカ海兵隊は今回のイラク戦争において、最前線のキャンプに硫黄島の名前を付けていたということになります。これが一度目です。

そういう書き方というのは読者をミスリードするものであって、スターリングラードとか硫黄島とかの本当の激戦とは違うんだと言っていました。つまりスターリングラードの攻防戦と硫黄島戦というのは彼らにとつて見ると同じレベルで語られるということになるわけです。これが二度目です。

名前が出てくると、なるほどこれは大変なものだなとつくづく感じます。もちろんインターネットには硫黄島戦に関するホームページも出ています。今回のイラク戦争の過程でたまたま私が入っただけでもこれだけあったのですから、本当はもっと言及されていたのかもしれない。

ただ私はこの本はあまりお勧めしません。些か不愉快な本です。というのは日本陸軍に対する考え方にある種のバイアスが掛かっています。読んでいてそんなにおもしろい本じゃないからです。ただ、当時の海兵隊がどういう考え方を持っていて、どういう訓練をして、そしてあの硫黄島まで行って戦ったかということについてはいろいろと参考になる本です。

二度目は、ケーブルテレビでCNNと競っているフォックステレビというのがあります。その有名なニュースキャスターがインターネット上に発表した文章をたまたま読んだことがありますが、彼はアメリカのメディアの報道の仕方を批判しています。例のバクダッド攻防戦、あれをアメリカのメディアはとんでもない激戦のように報道しているけれども違うんだと、

三度目は、これは五月一日、ブッシュ大統領が空母に戦闘機で乗り付けていると騒ぎになった時の、例のイラクにおける事実上の戦闘終了宣言のスピーチの中で、ブッシュ大統領がアメリカの兵士の勇気を讃えて「ノルマンディーや硫黄島の時と同じ勇気を今回もアメリカ兵は示してくれた、誇りに思う」と言ったのです。

ワシントンのアーリントン墓地の近くに巨大な海兵隊メモリアルがございます。摺鉢山のとつべんで星条旗を掲げている六人の兵士を象った巨大なメモリアルですが、これを知らないアメリカ人はもぐりだと言われるぐらい大変有名です。今や自由の女神像の地位を奪ってアメリカでもっとも有名なメモリアルになった」とブラッドリーは書いていますけれども、たしかにそれぐらい硫黄島戦というのはアメリカでは有名な戦闘ということになります。

このブラッドリーの本と先に紹介したニューカムの本との間には三十五年の歳月が流れているわけですが、その

硫黄島戦の時のアメリカ側の指揮官はポーランド・スミスという大変おもしろい軍人ですが、彼は有名な回想録を書いて、その中で硫黄島戦とゲティスバーク戦を結び付けています。つまり、アメリカ人にとつては、昔も今も、大きな危機に直面した時、硫黄島戦はノルマンディー、スターリングラードそしてゲティスバークと同じレベルで語られる、そういう非常に特別な戦闘であるということが、今回たまたまテレビを見ていたりインターネットを見たりして感じてきました。

硫黄島戦というのが非常に大きい戦闘なんだということは知っていましたけれども、こういう形で硫黄島という

ところが私は今年学生に硫黄島戦の話をしておりまして、日米比較文化という授業なんです。ビデオを見せたり何かしていますと、学生も本当にびっくりしたような顔をしています。最初の授業の時に「硫黄島戦を知っている者手を挙げる」というふうに言いました。学生はだいたい百五〇名位のクラスですが、手を挙げた者はゼ

今の日本人は殆ど硫黄島戦を知らない

このブラッドリーの本と先に紹介したニューカムの本との間には三十五年の歳月が流れているわけですが、その

硫黄島戦というものが非常に大きい戦闘なんだということは知っていましたけれども、こういう形で硫黄島という

硫黄島戦というものが非常に大きい戦闘なんだということは知っていましたけれども、こういう形で硫黄島という

硫黄島戦というものが非常に大きい戦闘なんだということは知っていましたけれども、こういう形で硫黄島という

口でした。そしてその後、もう一つ別のクラス、アメリカ小説という授業で、やはり百六〇名くらい学生がいるクラスですが、そこも同じ質問をしたら、やはりゼロでした。それで知り合いの東大の学生に聞いてみたら名前は知っていましたが、彼にしても「何とか鉢山の上に旗がたったような話でしょう」という程度ですから、大したことは無いのです。東大や早稲田の学生でこの程度であるということですから、ある程度の年齢以上の日本人を除けば、大方の日本人にとって硫黄島戦はゼロに等しいものでしか無いということだと思います。

私にしてもこのニューカムの本を読むまでは硫黄島戦なんて全然関心はありませんでしたから、それが普通なんだろうと思います。

しかし、二万人もの日本人が勇敢に戦って死んで、アメリカ人をして日本人の勇気に脱帽させたあの戦いを、今の日本の若者が全然知らないという現実ですね。若者に限らない、関心のある日本人はほとんどいないでしょう。限られた層しか、或は限られた年齢以上しかいないでしょう。

ところが今申し上げましたように、アメリカ人にとつては硫黄島戦というのはとてつもなく大きいのです。大統領も言及し、ニュース・キャスターも言及し、海兵隊は今なお自分たちのキャンプに硫黄島という名前を付けている

のです。それだけのギャップがあるわけですから。

日本がいくら負けたとはいえ、この彼我の隔たりはいったい何に原因があるんだらうかという事は深刻に考えるべき問題ではないでしょうか。日米同盟とかなんか言っていますが、そういう事よりもっと何か非常に深刻な問題があるんじゃないかと思えます。そういうことを連載の方では書きましました。今日はその問題には立ち入りませんけれども、是非お考えいただきたいと思えます。

栗林中将論の目的

ところで、栗林中将はアメリカに五年間滞在してアメリカ各地を車で走り回っております。アメリカを肌で良く知っていましたから、アメリカを敵に回したら如何に恐ろしいかということ、を陸軍の中で随分主張していたようですが、全然相手にされなかった。それどころか逆に干される結果になったようであります。

結局野戦軍の最高指揮官としての活躍の場を与えられたのは、最後の最後と言つてもいい硫黄島においてであった。

栗林中将がどうして硫黄島戦に起用されたかには、いろいろ憶説がありまします。例えば小笠原兵団長として最初に名前の上がったある有名な将官がいろいろと理由を言つて辞退したので、その結果栗林中将が貧乏くじを引く羽目

になったという説もあります。それから対米主戦派の軍上層部に嫌われ生きてもあります。逆に硫黄島の重要性にかんがみ、栗林中将を高く買つておられた昭和天皇が推挽した結果であるというふうな説もあるようです。

どれも決定的な説ではないのですが、いずれにせよ東条首相が栗林中将を指名しました。指名された日の晩、栗林は自宅に帰つて奥さんに、「首相から『君の他にやれるものはいないから宜しく頼む』と言われたが、今度は骨も帰らないかもしれない」と語つたということ

です。栗林中将が東条首相に指名されたということについては、二年程前にイギリス人のジャーナリストがやはり硫黄島戦の本を書いておりました。その事に触れてこういう事を言つておられます。「偶然か何らかの意図の結果かとはかく、正に天才的閃きの所産と言ふしかない指名であった」と。このイギリス人はデリック・ライトという人ですが、この人も栗林中将をものすごく高く買っています。ただ彼は本の中で「山本五十六と栗林忠道は日本の戦後社会において名譽ある地位を与えられている」と書いているのですが、どこからそういうことを考えるに至つたのか判りません。山本五十六の事は皆知っています。栗林忠道の事は誰も知りませんから、ただ、イギリス人として見れば、硫黄島戦であれだけの戦闘を指揮をした将軍が、祖国で名譽ある地位を与えられていない筈はないという思い込みからそういうことを言つたのではないかと思えます。

それはともかく、「栗林中将を硫黄島に指名したのは天才的閃きの所産」といつても、過言ではない。栗林中将はアメリカの実力を本当によく知つていた。知米派です。アメリカ仕込みの合理主義精神の持主です。第一線指揮官としての使命感や自覚を強烈に持つていた軍人ですから、アメリカ軍に一泡更かせるべく、これ以上ない指揮官が指名されたということになると思えます。

ただ、そういう栗林中将が最後の最後にやつと出番があつたということですから、栗林中将ばかりではなくて、沖繩戦の作戦計画を作つた八原博道という高級参謀がおりますが、八原参謀という人も栗林中将と同様の知米派で、やはり干されていきました。その八原参謀がアメリカ軍から非常に高く評価される戦闘指導をした。アメリカが太平洋における戦闘で評価しているのは、硫黄島戦と沖繩戦だけです。その最後の最後の二つの戦闘において、知米派の二人がやつと活躍の機会を得たということを我々はやはり忘れてはいけません。敵をよく知る彼らだからこそよく戦えたに違いないと思えます。

今回のイラク戦争を指揮した野戦軍の司令官、アメリカ中央軍司令官のフ